研究ノート

歴史都市の「光」と「影」
―超再生理論の構築をめざして―

リム　ボン*

「歴史都市」は，地球上のある特定の場所に立地し，極めて実存性をおびた都市ではあるが，同時に，世界性を兼ね備えた存在でなければならないという宿命を背負わされている。「歴史都市」に求められる能力とは，都市の建造年代が「古いか」「新しいか」ということではい。むしろ，歴史の生き証人として，人類社会が直面する複雑な問題群を適切に処理し，都市再生の新たなモデルを世界に発信することができるか否かという点にある。本稿では，京都を，日本の中の古都としてではなく，世界各地に点在する歴史都市の典型例（もしくはその先導者）として位置づける作業を試みた。とりわけ，「負の遺産」の価値転換を図りつつ，町衆文化と被差別部落，マジョリティとマイノリティの関係図式を再構築することで，京都の潜在力を浮き彫りにすることができると考えている。また，「歴史都市」という概念の定義，「超再生」という新たな概念の開発にも取り組んでいる。

キーワード：歴史都市，超再生，京都，マイノリティ，被差別部落，負の遺産，場所の力

１．歴史都市の定義

「歴史都市」という言葉が広く普及し，市民権を得るようになったのは，1987年，京都市が世界に呼びかけて「世界歴史都市連盟」を創設し，「世界歴史都市会議」を開催したことに端を発している。連盟会長都市には京都市が，副会長都市にはパリ市と西安市がそれぞれ就任した。会員都市の数は2006年現在で65都市（49カ国）におよぶ。「世界歴史都市会議」は2006年までに10回開催されている[1)]。それまでにも京都市は，パリ（フランス），ボストン（アメリカ合衆国），ケルン（ドイツ），フィレンツェ（イタリア），キエフ（ウクライナ），西安（中国），グアダラハラ（メキシコ），ザグレブ（クロアチア），プラハ（チェコ）等，少なくとも建都400年以上の世界に名だたる「古都」たちとすでに姉妹都市関係を締結していた。しかし，国際化をより一層推進することを行政課題とした京都市は，いわゆる「古都」だけではなく，比較的新しい都市との交流・連帯をも図ることを重視した。そうして考え出されたのが「歴史都市」という用語であった[2)]。

さて，このように自治体行政用語として開花した「歴史都市」であるが，その概念が学術的に定義されている訳ではない。ここでは，「歴史都市」という概念を筆者なりに定義する作業に取り組みたい。筆者は「歴史都市」という概念を都市研究のための方法論として活用するこ

＊立命館大学産業社会学部教授

とを意図している。つまり，いま，なぜ「歴史都市」なのかという命題への挑戦でもある。

「歴史都市」という概念を定義する鍵は，“historical”と“historic”という形容詞の違いに端的にあらわれている。“historical”が「歴史的な」「歴史性のある」という意味を持つのに対して，“historic”は「歴史的に重要な」「歴史的に価値のある」「歴史的に有名な」という意味を持つ。

都市デザインを含む「計画」という行為は，人類の本能のひとつに数えられるであろう[3)]。古代ギリシアのポリスを引き合いに出すまでもなく，人類はその本能にしたがって数千年にわたって営々と空間のデザインにいそしみ，結果として無数の都市を創造してきた。そして，既に消滅してしまった都市も含めて，これまでに建造されたすべての都市が歴史性をおびていたことは事実だ。すなわ，地球上に存在する都市はすべてが historical な存在なのである。しかし，それらすべてに「歴史的に重要な価値」，すなわち historic な特質を見いだすことは不可能である。「歴史都市」という称号を与えられるのは，残念ながら，ごく一部の都市に過ぎない。

では，「歴史都市」という称号が与えられるにはどのような条件あるいは実績が必要なのか。筆者は次の２点を想定している。第１に，文明の興亡に関わる重大な歴史的事象に遭遇した経験を有し，その「教訓」を継承していること。いわば，歴史の生き証人として，人類に「記憶の再生」を促す装置であること。第２に，未来に向けて，人類の歩むべき道筋，あるいは文明の方向性を指し示す「道標」としての役割を担うことができること。

この２つの点において「歴史的に重要な価値」が見いだされ，「歴史都市」とみなされるのである。すなわち，「歴史都市」という存在は，地球上のある特定の場所に立地しつつも，それ自体が世界性と普遍性とを有するものでなければならない。ここで問われるのは，都市の建造年代が「古いか」「新しいか」ということではなく，文明社会の功罪の生き証人として，人類が直面する諸問題を解決するための糸口を見出すための有力なメッセージを発信することができる力量を有するか否かという点である。このような視点からみると，現時点では世界歴史都市連盟には加入していないが，「歴史都市」としての資格に値する都市は他にも存在する。たとえば，ニューヨークがそうだ。ニューヨークは400年の歴史を有し，アメリカ合衆国創建当時は５年間首都の座にあった。20世紀以降，金融，芸術，学問等の分野において世界の中心となる都市として人々を魅了してきた。また，2001年に勃発した「９・11事件」という歴史的大事件の事件現場であり，その跡地（グラウンドゼロ）が，今後どのように位置づけられ，どのように再生されていくのかということは，人類社会の未来を展望する上でも極めて重要な意味を持つことになる。

２．伝統と創造の市民社会

歴史都市の本質は，その驚異的な「持続性」（*Sustainability*）にある。たとえば，国家が消滅しても生き続けてきた歴史都市が数多く存在するという事実がそのことを証明している。これまでに歴史都市を襲ってきた破壊圧力は，単に経済合理主義や空間の物理的老朽化によってのみもたらされたのではなく，むしろ，戦争・内戦・侵略・テロ・独裁政治・人種差別・階級対立・宗教対立などの複合的要因によってもたら

された。にもかかわらず，歴史都市が「持続性」を失わずに済んだのは，悠久の時間の流れの中で育まれ，蓄積されてきた市民自治能力という「伝統」がその背景に横たわっていたからである。「伝統」という概念を安易に信用すべきかどうかというのは議論を要するであろう。少なくとも，継承すべき「伝統」と切り捨てるべき「伝統」を見極める必要はある。しかし，継承に値する「伝統」というものは，「創造のための運動エネルギー」であり[4]，未来の可能性を映し出す鏡として機能する。歴史都市の場合，継承に値する「伝統」を列挙してみると，おおよそ次の５つが考えられる。第１に，進取の気鋭という精神性（Modern）。これは，いつの時代にも存在する閉塞状況に対して，これを打開するための作業に果敢に取り組み，最先端ニーズを掘り起こす努力を意味する（いわゆるModernismとは異なる）。つまり，「変革」こそが「伝統」なのである。第２に，学術文化がそれを先導する役割を担っている（Academism）。これは，歴史都市の多くが「大学都市」であることと決して無関係ではない。第３に，このような努力の結果が世界的な展開力，すなわち普遍性を有している（Global）。第４に，都市の構成要素であるコミュニティ（テセラ）が活発に機能し，色鮮やかな都市のモザイク画を描き出している（Mosaic）。つまり，個々のコミュニティの役割が明確であるということだ。そして第５に，市民の自治・自律の成熟化が達成されている（Autonomy）。これら５つの頭文字を並べてみるとMAGMAという単語が浮上した。沸々と煮えたぎるアーバン・マグマがさめやまぬ限り，歴史都市は生き続けるということか。

３．「超再生」とは

「超再生」とは，いったん破壊された既存実体を，従前よりもはるかに強化された実体へと蘇生させるための作業過程を指す[5]。これは単なる原状回復ではなく，むしろ既存実態の質的転換，すなわち，ある種の「変身」を促すことを主眼とした概念である。この概念を，歴史都市に適用し，その未来像を描き出してみたい。

ここで少し寄り道をして，超再生という概念を，国家レベルに置き換えて考察してみたい。日本という国家は近代化の過程で少なくとも２度にわたって超再生を経験している。最初は，言うまでもなく明治維新であった。明治政府は大日本帝国憲法（いわゆる明治憲法）を樹立し（1889年），富国強兵に邁進し，驚くべき成功を収めた。日清戦争，日露戦争，さらには第１次世界大戦の戦勝国となった。同時に，教育制度の改革にも成功した。この点について，アマルティア・センが興味深い指摘をしているのでここで引用してみたい。

「日本の場合を考えてみましょう。19世紀半ばの明治維新当時のことです。ヨーロッパが１世紀をかけて経験してきたような近代的な工業化や経済発展は，日本ではまだ緒についたばかりでした。それにもかかわらず，日本人の識字能力の水準はヨーロッパを凌駕していました。明治時代（1986～1911）における日本の発展初期においては，このような人間の潜在能力の発展が主眼とされました。たとえば，1906年から1911年にかけては，日本全国の市町村予算の43％が教育費にあてられていたわけです。この時期における日本の初等教育の普及はたいへん急速でした。1893年には徴募された兵士の三分

の一が識字能力を持たなかったというのに，1906年頃になると，読み書きのできない者はほとんどいなくなっていたという事実に，陸軍の徴兵担当官たちが感銘を受けています。1913年頃の日本は，経済的にはまだ発展途上にありましたが，書籍出版に関してはもうすでに世界一になっていました。出版点数でイギリスを抜いており，アメリカの２倍以上にも達していたのです」[6]。

実は，教育の問題は，国家の近代化過程のみならず，後述するように，歴史都市の超再生においても極めて重要な要素となるのである。

富国強兵，教育改革，そして帝国主義化で一定の成功をおさめたものの，約半世紀後には制度疲労が見られ，限界を迎えた。昭和の時代に入って15年戦争に突入し，結果的には，第２次世界大戦での敗戦国となった。ところが，これを機に，２度目の超再生を達成することになる。それは経済大国への道であった。1980年代後半，日本は空前のバブル経済期にあって世界第２位の経済大国となった。しかし，1990年代に入ってバブル経済は崩壊し，その後10年以上にわたって不良債権処理を含む「負の遺産」の解消に取り組まなければならなかった。このように日本は近代化の過程で，約半世紀の周期で制度疲労を体験し，同時に，国家のパラダイム転換に直面してきた。そして21世紀初頭，3度目の超再生の道を模索しているように思える。そしてその鍵を握るのが文化の力だと考えている。偏狭なナショナリズムに利用されることがあってはならないが，真摯な姿勢で日本の文化力の重要性を主張する世論も高まってきている。たとえば，経済同友会がこのことを明確に意識した提言を行っている[7]。

歴史都市の超再生に話題を戻そう。徳川幕府がおかれた江戸は1700年代の初期から既に人口100万を擁する大都市であったが，1868年，東京と改称され，明治憲法樹立後は，帝都の威容を誇るための都市建設が活発に繰り広げられた。これも一種の超再生であろう。しかし，それ以上に超再生の必要性に迫られたのは，首都の移転によって著しく衰退した京都であった。危機に瀕した京都は，観光都市政策，琵琶湖疏水の開発，西陣織の復興，など，自らの生きる道を探る方策を次々と打ち出した。そして何よりも，番組小学校の創設をはじめとする教育事業の充実に京都創生の活路を見出したのであった。

京都は，応仁の乱，戊辰戦争，明治維新などの影響で幾度も衰退を経験した。そしてその都度，不死鳥のように蘇った。しかもそれは，過去への単純回帰ではなく，それまでには存在しなかった，新たな要素を組み込むことによって達成された京都創生であった。

４．方法としての京都

研究フィールドは京都である。だが，本稿で展開するのは，いわゆる「古都論」ではない。あるいは，昨今流行りの「京都学」でもない。筆者の問題関心は，京都を，日本の中の古都としてではなく，世界各地に点在する歴史都市の典型例として，あるいは，その先導者として位置づけ，そこにどのような教訓や可能性が浮上してくるのかを探求することにある。いわば，京都に，ギリシアの建築家ドクシアデスが1963年に提唱した「エキュメノポリス」（世界都市）像を重ね合わせている[8]。つまり，ある特定の場所に立地しながらも，世界的な影響力を持つ都市のことである。ニューヨーク，ロンドン，

東京といった金融の中心を世界都市と位置づける「グローバル・シティ」論[9]とは異なる概念である。

ヨーロッパのいくつかの歴史都市を訪れてみると，様々な局面で，京都との類似性が存在していることに気づかされる。歴史都市のほとんどは，かつて，あるいは現在も，一国の首都として君臨し，富と権力とを集中させてきた。政治，経済，学問，芸術，おおよそあらゆる分野において，その時代の最高峰のものが集積し，それらをめざして，人と物と金が集中した。同時に，生活の糧を求めて移動する多くの「流民」（Displaced Persons）たちをも惹き付けた。このような現象は，必然的に，歴史都市に繁栄と活力とをもたらし，華麗なる文化を開花させた。それらの多くは，今日も，各国の伝統文化の粋を極めるものとして重宝され，継承されている。都市計画や建築デザインはどうか。歴史都市の中心市街地の街区構成には，人と物と金の集積を色濃く反映して，建築物が高密度に集積している。街区は，動脈となる表通りによって整然と区画されているが，同時に，静脈のように張り巡らされた裏通り（＝路地空間）も無数に存在している。表通りとそこに林立する建築群が権力者の象徴であるのに対して，路地空間には人々の暮らしの風景があり，趣（おもむくき）のある雰囲気で彩られ，コミュニティの気配が漂っている。加えて，人々の気高さも感じられる。どれをとっても，どことなく京都と相通じるものがある。実際，京都の都市構造を分析すればするほど，あるいは，京都の町中を歩けば歩くほど，西欧的なるもの，あるいは，アジア的なるものを感じるのである。たとえば，祇園祭の鉾や山を彩る懸装品をみていると，和風ではなく，むしろ洋風の趣があるといったほうが正しいとさえいえる。なかでも鯉山（こいやま）を飾る懸装品は，１枚のタペストリーを裁断して見送幕・前掛・胴掛・水引幕に仕立てられているのであるが，なんと，そこに描かれているのは，ギリシア詩人ホメロスの叙事詩「イーリアス」の中の「トロイア戦争物語」である。この懸装品は，16世紀に，ヨーロッパのブラバント領ブリュッセル（現在のベルギー）で製作されたタペストリーである。タペストリーは，当時，ベルギーの繁栄を支える基幹産業であった。１枚のタペストリーを制作するのに３年もの歳月を要することも珍しくなく，その価格は，「お城を一軒購入するのに相当する」といわれるほど高価であったといわれている。このようなものを祇園祭の鉾や山の懸装品として購入することができるほど，当時の京都の町衆たちには経済力があったのかも知れない[10]。また，当時の京都では，織田信長によって保護されたキリスト教が布教活動を展開していて，その拠点となった南蛮寺（キリスト教寺）が祇園祭の鉾町に立地していたことも何らかの形で影響しているのかも知れない。

５．マジョリティとマイノリティ

しかし，筆者が何よりも注目している類似性は，歴史都市の社会構造，すなわち，マジョリティとマイノリティの関係である。いつの時代も，歴史都市の表舞台に登場し賞賛されるのは，権力者たち（京都では町衆）を主役としたマジョリティの文化であった。歴史都市の「光」の部分である。他方で，「光」の部分を支え続けてきたにもかかわらず，あるいは実質的にそれを創造してきたにもかかわらず，「影」の部分に追いやられてきた被差別民たち（マイ

ノリティ）の文化が，歴史都市には必ず息づいている。かつて，祇園祭の長刀鉾の先頭を歩く役割を担ったのは被差別民たちであった。室町時代に能楽師として活躍した世阿弥，あるいは庭造りの名人といわれた善阿弥世も被差別民であった。彼らは優れた技能の持ち主でありながらも蔑まれる状況に置かれていたのだが，このようなことは意外と知られていない。

パリのマレ地区，プラハの旧市街，ワルシャワの旧市街，いずれも世界遺産に指定されているが，そこには必ずといっていいほどユダヤ人集住地区（ゲットー）が組み込まれている。京都の場合にも，都心周辺部に被差別部落と朝鮮人部落が点在している。好むと好まざるとにかかわらず，歴史都市の多くは，多文化都市としての，あるいは多民族都市としての宿命を背負わされているのである。それは必ずしも，清く・正しく・美しい世界でなく，むしろ残酷で呪われた側面を持つ世界であるといっても過言ではないだろう。マイノリティのコミュニティは，都市のスラムとして位置づけられることも多い。マジョリティにとって，いつの時代も，スラムは別世界の問題として認識され，黙殺されてきた。京都では，被差別部落や朝鮮人部落がまさにその典型であった。京都の場合は，さらに，町衆たちが暮らす鉾町にも，マジョリティとマイノリティの関係が厳然と組み込まれていた。町衆と呼ばれる人々は土地・家屋の不動産を所有する人々であり，路地の借家に暮す人々はその対象ではなく，祇園祭の担い手にもなれなかった。歴史都市の実相を理解するためには，このような問題を直視することを避けて通ることはできない。世界の歴史都市が共通に抱えている「光」と「影」の相互依存関係，表舞台に登場するマジョリティの文化と，それを裏で支え続けてきたマイノリティの文化の緊張関係を描き出すことによって，はじめて，歴史都市の未来像を構想することが可能となるのである。

６．「負の遺産」の価値転換

本稿では，マイノリティ・コミュニティを，歴史都市の「超再生」のための社会資源（social asset）として位置づけ，そこに蓄積されてきた創造的パワーを発掘し，これを大いに活用するための方策を探求したい。マジョリティの「光」の文化とマイノリティの「影」の文化が双方向に作用し合う都市構造を構想する作業は，「光」の文化を決して軽視するものではない。むしろ，優美で親しまれやすい伝統文化をより一層継承・発展させる努力は必要である。世界の歴史都市の現状をみるかぎり，「光」の文化が常に安定的に維持されているわけではない。むしろ，伝統産業の衰退や後継者不足，景観破壊など，「光」の文化も常に消滅の危機に晒されていると考えたほうがよい。マジョリティといえども決して磐石なわけではないのである。これを少なくとも元の状態に再生させる努力，あるいは，より一層強化させる努力を怠ることはできない。同時に，とかく「負の遺産」としてとらえられがちなマイノリティ・コミュニティの「影」の文化にも照射し，歴史の闇の中に埋もれていた価値を表舞台へと浮上させ，これを積極的に再評価し，「光」の文化へと，その価値転換を促す努力も必要なのである。この両方の努力が結合したとき，歴史都市の超再生は達成されると，筆者は考えている。

京都は1100年にわたって首都の座を維持し続けた世界でも類稀な歴史都市である。数多くの

世界遺産を有する一方で，深刻で多様な都市問題も集積している。「負の遺産」を多く抱える都市なのである。世界のほとんどの都市は必ずしも幸運な歴史をたどってきたわけではない。とりわけ過去100年の間に，世界の都市は開発の波に曝され，その過程で，多くの歴史遺産や自然環境が破壊されてきた。21世紀，世界の都市は再生のベクトルを模索している。その中で，最も深刻な状況に直面しかつ緊急対策を要するのが世界各国に点在している歴史都市なのである。歴史都市に絡む複雑な方程式を解くことに成功すれば，その都市政策モデルは，世界のあらゆる都市問題に適用することが可能となる。

日本国内に目を転じてみても，現在，全ての大都市が，都心部の衰退に喘ぎつつもこれを再生させるための課題に取り組もうとしている。そんな中で，京都がおかれている状況はその深刻さにおいて突出しているといっても決して過言ではない。20世紀末になって，住宅ストックの老朽化，人口の高齢化，地場産業の衰退，違反建築の横行，町並みの破壊，そして環境汚染等々，およそ都市の機能障害をもたらす要因がワンセットで，しかも複雑な問題群として一気に顕在化した。もはや，これまでに実施されてきた単純な政策手法，すなわち，個々の課題に対して個々の施策で対応するといった従来の手法をいくら適用してみても，「施策の堂々巡り」もしくは「問題のモグラ叩き」の様相を呈するだけで，実質的な効果を期待することはできない。複雑な問題群を一括処理することが可能なシステムの登場が待たれているのである。そしてそれは，行政万能主義や行政依存主義から脱却し，地域社会を支える「人」と「組織」と「コミュニティ活動」の重層的な相互連関システムを構築することによって実現する[11)]。

次に，自治体行政の使命という問題に視点を移してみると，歴史都市の経営を直接担っている自治体は，大きく分けて３つの使命を背負っているものと考えられる。１つは，都市問題への挑戦，すなわち市民生活の「器」としての都市機能を持続的に経営しなければならない点である。この点は，どの自治体とも共通する使命である。２つは，人類の有形無形の歴史遺産有形無形を保全し継承しなければならない点である。とりわけ，「みやこ」として君臨したことのある歴史都市では，豊な文化的・芸術的遺産の集積のみならず，活発な人口移動に起因する階層分化，差別問題等の深刻な人権問題をも抱えている。「光」と「影」を相手にした行政実務をこなさなければならないのである。そして３つは，学術文化の拠点であり続け，知的インフラストラクチュアを整備し続けなければならない点である。そのために，大学や研究機関などのアカデミズムと政治・行政・経済界・NPO・NGO との連携システムを構築し続けなければならない。

７．「場所の力」

歴史都市の「光」と「影」の問題を考える時，ドロレス・ハイデンの著書「場所の力」は大いに示唆に富んでいる[12)]。ハイデンの著書は冒頭から刺激的である。1975年の１月から２月にかけて「ニューヨークタイムズ（*The New York Times*）」紙上で繰り広げられた，ニューヨーク市のランドマーク指定をめぐる都市社会学者と建築評論家の派手な論争を紹介するところから始まっている。この論争がどのように決着したかは別として，この論争に対するハイデンの視

点が実に興味深い。ハイデンは，これまで「学問としての建築は社会的政治的分野に真正面から取り組むことはなかったし，他方，社会史の分野も空間やデザインを熟慮することなく発展してきた」と両者の欠点を指摘しつつ，「この両者の関係こそが，アメリカの都市の将来の運命を握っている」と断言している。そこで登場するのが「場所の力」という概念である。「場所の力」とは，ハイデンによれば，「都市の歴史的ランドスケープが持つ力であり，一般市民が共通の記憶を育む際の一助となる力」である。そしてその源泉は，国籍，民族，ジェンダー，人種，社会階層など，時として反目し合うアイデンティティをも超越し得る，より大きな「共通テーマ」（あるいは社会的記憶，たとえば，移住の経験，家族との離散や再会の経験）にあるとしている。故に，「完璧なまでにブルドーザーの下敷きになってしまった場所でさえ，かつて庶民に共有されていた社会的意味，空間的対立の存在あるいは挫折や絶望の記憶を復元するような場所になり得る」のだ。これは極めて重大な問題提起ではないか。このことを実証するために，ハイデンは，かつての労働者住宅地，アフリカン・アメリカンの暮らし，ラテン系アメリカ人女性の活動，そしてリトルトーキョー（日系移民街）など，マイノリティの記憶を丹念に追った。ハイデンのフィールド（場所）はいずれもアメリカ合衆国内に立地している。しかし，ハイデンの問題提起は，京都の部落問題などのマイノリティ・コミュニティを分析するうえでも極めて有効である。

註

1） 第１回が1987年に京都で開催され，フィレンツェ（第２回，1988年，イタリア），バルセロナ（第３回，1991年，スペイン），京都（第４回，1994年，日本），西安（第５回，1996年，中国），クラクフ（第６回，1998年，ポーランド），モンペリエ（第７回，2000年，フランス），モントリオール（第８回，2003年，カナダ），慶州（第９回，2005年，韓国），バララット（第10回，2006年，オーストラリア）と続いている。

2） 立命館大学産業社会学部では2003年度，京都市の現役職員を講師に招いたリレー講座『京都市行政論』を開講したのであるが，その第三回「京都市における国際化の展開」（2003年４月24日）において当時京都市総務局国際化推進室担当課長であった高溝良輔氏が行った講演を要約するとこのようになる。

3） われわれは日常生活の中で，たとえば，学校や職場に時間通りに辿り着くために，道順や利用する交通手段などを無意識のうちに計画している。予定通りに到着することができれば，その計画は成功したことを意味する。都市計画は失敗に終わることが多いことから，しばしば，無用の長物と批判されることがあるが，それは，都市計画という行為に問題があるのではなく，実効性を持たない計画を策定する側に問題があるとかんがえた方がよいようにも思える。

4） 辻井喬『伝統の創造力』岩波新書，100-105ページ，2001年

5） 電波の受信機の検波方式として超再生検波（super-regenerative detection）という概念が用いられることがある。また，スポーツ医学では，筋力の鍛え方として超再生という概念が用いられることがある。いずれも，再生過程で，意図的に破壊作用を繰り返し，従前よりも機能を強化させるという点で共通する概念である。いわば，創造的破壊という行為とも読み取れる。都市を対象とした場合には，「意図的に破壊作用を繰り返す」というような実験を行うことは不可能であるし，また，あってはならないことでもある。しかし，実態としては，都市は，絶えず様々な破壊圧力に晒されているし，再生のための方途を模索している。このような現状を直視しつつ，都市政策の新たなる可能性を切り開くことを意図して，本書では超再生と

いう概念を用いることにした。

6）　アマルティア・セン『貧困の克服』，大石りら訳，集英社新書，24ページ，2002年

7）　世界における日本の使命を考える委員会（委員長：下村満子）「日本のソフトパワーで「共進化（相互進化）の実現を－東アジア連携から，世界の繁栄に向けて－」，（社）経済同友会，2005年

8）　ドクシアデスは，人間定住社会（エキスティックス）の空間尺度を身近な順に，部屋→家屋→プロット→ブロック→近隣→コミュニティ→小都市→中都市→大都市→メトロポリス→メガロポリス→大きなリージョン→エキュメノポリス，とした。ところが，「部屋」から「大きなリージョン」までは三次元的空間の広がりであるのに対して，「エキュメノポリス」については，ある特定の場所に位置しながらも「世界的な都市」という質的な尺度を用いている（ドクシアデス『新しい都市の未来像』，磯村英一訳，鹿島研究所出版会，1965年）。

9）　Saskia Sassen: The global city, Princeton University Press, Second Edition, 2001.

10）　林屋辰三郎の論考（『町衆』，中公文庫，1990年）を要約するとおおよそ次のようになる。今から約600年前，それまで商業地域を意味していた「町」が，次第に集団的地域生活組織としての「町」という意味をも包含するようになり，この両者の統一としての「町」が定着した。治安も自主的に維持され，住民の団結性を高めた。この過程で「町衆」も定着した。嘉吉の変（1441年）前後，町々に組織された商・手工業者が「町衆」である。大永から天文（1521～1532年）の時期になると，町衆には，土倉衆ばかりでなく，没落公家衆をも含みこみ，一段とその内容を充実させ，新たに，極めて有機的な地域的集団生活を形成することになった。町衆は，いまや土倉衆の擁する巨大な富力とあわせて，公家衆の持つ豊富な教養からの影響を受け，真に町衆らしい，経済力と文化性を持った人間が，その町中で育てあげられた。「町衆」という呼称も，そのはじめは，この時期に町の生活者となった公家衆たちによって自然に唱えられるようになったものであって，町に居住する商・工業者を指すのであるが，町衆としては公家衆も自分たちと同じ町のうちに生活していることから公家衆とのあいだに疎隔感をもつことなく，地域的な集団生活をきわめて的確に表現したものである。天文年間以降，二つの方向が現れた。一つは，上層の町衆は単なる上層という立場から特権商人の方向をたどりはじめる。二つは，家持層と借家人層との階層分化が次第に強化され，その間に農村における地主対小作人の関係に近い対立関係が現れた。このように，町衆は，都市の商・工業すなわち経済発展の担い手であったと同時に，芸能，文化，国際化の推進役でもあった。

11）　たとえば，ニューヨークのタイムズスクエアに奇跡をもたらしたNPO法人，コモン・グラウンド・コミュニティ（Common Ground Community）の活動事例がこれを実現している。廃墟と化した伝統的建造物を改修してランドマーク指定を受け，ここで低所得層者やホームレスのための住宅供給事業を実施し，その付設店舗で商業を営み，同時に職業訓練を実施することに成功した。これは，町並みの保全と社会福祉と地域経済の再生とを複合的に達成し，しかも従前よりも高度な都市ストックを創出することになった。すなわち「超再生」の典型的な事例である。このような先進的事例は各地の歴史都市においても断片的に散見されるのであるが，このような個別事例を検証し，その意味を再構築する作業を実施することが求められるであろう。

12）　ドロレス・ハイデン『場所の力』，後藤春彦ほか訳，学芸出版社，2002年

The Light and Shadow of a Historic City: Towards a Theory of Ultra-Regeneration

LIM Bon *

Abstract: Historic cities are located in specific geographical areas and are very real places. At the same time, they are destined to possess universal features. The requirement of a "historic city" is not whether it is old or new. Rather, it lies in its ability to pose to the rest of the world as a living historical witness and a model of how it has successfully dealt with, and gained new grounds in resolving, the ever so complex problems that human societies face. In this paper, the author does not define Kyoto as an ancient capital of Japan, but instead, views Kyoto as a city reflecting, or even taking the lead in defining, the typical features of a historic city. The paper illustrates the potential energy Kyoto city possesses by focusing on the process through which a negative heritage is used in the service of producing positive results, with the relationship between the *machishu* culture and the *buraku* community, or the majority and minority, shuffled and reconstructed. In addition, the author attempts to generate a new definition of what a "historic city" is and to provide a new paradigm for what the author calls the "ultra-regeneration" of a city.

Keywords: historic city, ultra-regeneration, minority group, Kyoto, buraku community, negative heritage, the power of place

* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University